

## 『大阪市街精密地図（船場之部）』

明治 39 年 徳山昇三（著作権印刷発行人） 河内屋（発売） 55 cm×78 cm

関西大学図書館蔵

船場地域限定の営業者地図である。道路を黄、区画を赤で印刷し、建物区域を白地に彩色している。すべての営業者を掲載していないが、いろいろな商店、会社、銀行などが細かく書き入れられている。

『浪華名所獨案内』に記載されている「小山ひぜん葉」、「ウルユス本舗」がある。心齋橋筋の「丸善書籍商」は今の「丸善」で、大正半ば、大阪高校在学中の藤沢桓夫、秋田実、長沖一らが、難波からぶらぶらと歩いて立ち寄った店だ。少し北に進むと、当時の大手出版社「青木嵩山堂」があり、その並びに「石原時計店」がある。現在は淀屋橋で営業をしている。時計台がある三階建ての赤煉瓦の建物だったそうだ。右向かいの「石原楽器部」も石原時計店の経営である。「浅田飴」の名前もあるが、大阪支店だ。淡路町の「藤沢私塾」は「泊園書院」だ。「灘万」、「大林組」、「大阪毎日新聞」、「花外楼」の名前も見える。安綿橋北詰には「高橋コーヒ商」もある。その他、弁護士、医院、謡曲師、易者、などなど、船場には実に多様な職種の人たちが生活していたことがよくわかる。絵はがき商、電気自療機械商、神興商、骨牌商、活字製造、三味線商、大工道具商、と、店の種類も多様で、「商店」で一括することができない。瓦町に「秘密通信社」なる名前があるが、どのような仕事をする会社だろうか。

この地図を見ると、「船場は商人の町」といっても、商人だけの町ではないことがよくわかる。地図には出てこない、多数の職能技能を有する人たちが暮らしていたのが船場の実態であり、そうすると「大阪は商人の町」という言い方も疑問に思える。このように、さまざまな職業者が同じ空間に集まり、生活の場と仕事の場がほぼ同一で、その中に寄席などの娯楽の場も存在する。これが大阪の都市空間の特徴の一つで、生活、仕事、娯楽の場が同一であることから、日常生活に笑いがあふれることになり、大阪の笑いの文化を育て上げることになるのではないか。この地図を見ると、そのような状況がよくわかってくる。

この地図は、国際日本文化研究センターがネット公開している。「大阪市街精密地図 船場之部」で検索→検索結果の「国際日本文化研究センター」のサイトを開く。

「古地図で愉しむ大阪まち物語」が「船場の通と筋の名前についての考察と提案」という興味深いブログを公開している。「大阪市街精密地図 船場の通」で検索→検索結果の「古地図で愉しむ大阪まち物語」のサイトを開く。

